こだいらちょっとむかし

あけましておめでとうございます。今年は、小平の南を流れる玉川上水にちなんだ、ちょっと昔のお話を紹介します。

昔の玉川上水の様子

玉川上水ができる前は、この辺りは一面のススキ野原で、水が乏しく、人が住めない場所だったんだって。

玉川上水ができ、用水を引いて、畑を作り、人々が生活できるようになっていったんだね。

それからずっと、玉川上水は流域の村々をうるおし、江戸、東京の町へ飲み水を送り続けてきたんだよ。

昭和四十年ごろまで、玉川上水の土手には桜の木しかなかったの。

下草も短く刈りそろえてあって、日当たりが良くて、気持ちが良い場所だったよ。

土手は今より広くて、よく歩いたけど、今みたいに柵がなかったので、落ちないように注意したものだよ。

ときには、大きなヘビがとぐろを巻いて、日向ぼっこをしていたね。

アオダイショウというヘビで、毒はないんだけど、びっくりして、思わず逃げ帰ったこともあったわね。

今は、上水のふちに、たくさんの木が生い茂っていて、昔とはずいぶん違うね。

玉川上水のお花見

玉川上水といえば、昔は、春のお花見がなにより有名だったんだよ。

上水ができて、五十年ほど後に、川崎平右衛門という代官が、桜の苗木を一千本、人に植えさせたのが、玉川上水のさくらのはじまりだそうだ。

桜が植えられたのは、小村井橋の上流と下流３キロメートルずつの計６キロメートルなんだよ。

桜が成長すると、江戸随一の花見の名所になったんだよ。桜の時期には、近くの人々だけじゃなく、江戸から泊まりがけで花見客がやってきたそうだ。

明治十六年には、明治天皇が、馬でお花見に来られたんだよ。

小金井橋近くの海岸寺のあたりで休まれたので、それを記念して植えられたのが行幸の松なんだって。

小平の御幸町は、この行幸にちなんで、名づけられたんだね。

明治の中頃に中央線がひれると、日帰りで、東京からくさんの人が来たんだって。

昔は、上水の土手にござを敷いて、花見をしている人たちがたくさんいたの。

上水沿いの農家では、自分の家の前に赤い布を敷いた縁台を並べ、花見客に料理や酒を出したものだよ。

小屋掛けをしたり、座敷を開けて、上がれるようにしたりする家もあったんだよ

料理は農家が作るものだから、たけのこや芋の煮物、卵焼き、いなりずし、のり巻きなどだったね。

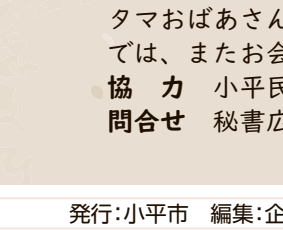
さくらん棒という甘いふ菓子や、造花で作られた桜の花のかんざしなんかも、並んでたね。

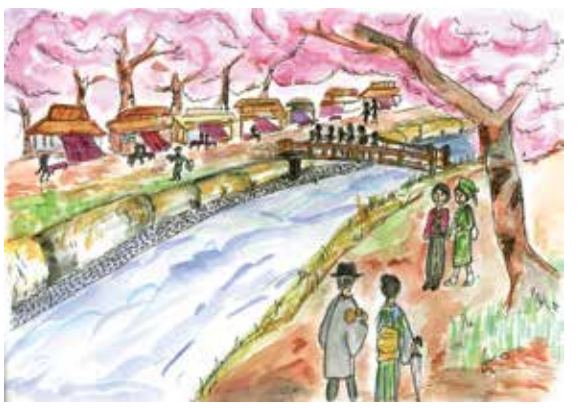
ぼたもちを作るのが上手なおばあさんが、ぼたもちとだんごの店を出していたよ。

どこの家でも入口に大きな赤や紫ののれんをかけて、とってもきれいだったよ。

花見のときだけで、一年分のお金が入った家もあったんだって。

今では、五日市街道の交通量が増えたりして、桜の木もずいぶん弱ってしまい、昔みたいなお花見ができなくなってしまったけどね。





玉川上水の通船

明治時代にほんの一時だけ、玉川上水に船が通ったことがあったんだよ。明治三年から五年までの、たった二年間だけなんだけどね。

船といっても、上水の幅が狭いから、公園の池にあるボートぐらいの大きさだったそうだよ。

すれ違うのも大変で、上水を下る（東京に向かう）日と、上る（多摩に向かう）日に分けられていたそうだよ。

船には、おもに野菜やまき、炭、酒、織物などを乗せ、一日かけて上水を下って、東京に運んだんだよ。

帰りは、多摩にない塩や塩魚を乗せて戻ってきたんだよ。流れに逆らうので、二人の人が船にロープをつけ、両岸から引いて、羽村まで歩いていったんだって。

だから、帰りは三日もかかり、賃金は二倍とられたんだって。

芝居や東京見物にいく人も乗ったそうだよ。

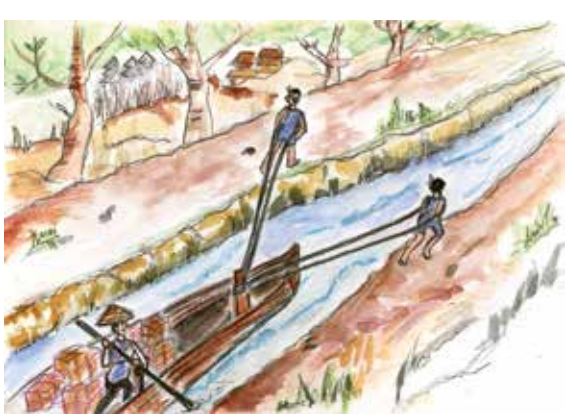
玉川上水を船で下って、お屋敷に奉公にいった人がいたんだって。行儀作法やお裁縫を習えるので、このあたりの大きな農家や商家の娘が、花嫁修業に行ったんだよ。

江戸時代なら御殿女中（宮中・将軍家・大名などの奥向きに仕えた女中）だけど、このときはもう明治時代になっていたから、どこかの大きなお屋敷に行ったんだろうね。

通船は、百そうもの船があって、とてもにぎわったんだって。

だけど、船が通ると、どうしても水が汚れてしまい、帰りの船を引くことで堤が崩れるので、二年ほどでなくなってしまったそうだよ。

今でも、ところどころに、当時の船着場の跡が残っているよ。



タマおばあさんのお話はいかがでしたか。
では、またお会いしましょう。

協　力　小平民話の会
問合せ　秘書広報課☎042(346)9505

発行：小平市　編集：企画政策部秘書広報課　〒187－8701　小平市小川町二丁目1333番地　☎042(341)1211(代表)　FAX042(346)9513(代表)※宛先を必ず記入。